

直木三十五全集

19

直木三十五全集

19



示人社

直木三十五全集第19卷

平成三年七月六日発行

編纂協力 直木三十五全集刊行会

発行者 宗野信彦

発行人 東京都文京区水道一―九―一
株式会社 示人社

郵便番号 一―二―二
電話 東京三八二―二四一三

印刷 製本 装幀
モリモト印刷株式会社
イワサキ・ミツル
落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第19巻（昭和10年9月15日発行）を用いた。

第十九卷目次

風流殺法陣

出	恐	第	第	心	盜	亂	險	訴	内	無	休	序
		二	一	の				へ	記	住	み	
		の	の					る	出		茶	
		争	争					人				
動	怖	闘	闘	陰	み	舞	雲	々	府	心	屋	景

三 二 四 四 二 七 四 〇 六 三 元 三 三

誓	殺	か	愁	淺	離	内	要	爆	第	第	無	媚	墮	心	宿	錯
	法	ぶ		貝		記			二	一	住	女	ち	形		
	自	き		斬		憤			の	の	心	群	て	刀		
	然	者							衝	衝	劍		行			
	解	氣	訴	り	散	死	擊	發	突	突	奥	秘	生	く	流	誤
言		質														

二三	二七	二二	一六	一五	一〇	九	七	六	五	四	三	二	一	〇	九	八
----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

災	角	新	交	角	颶	藏	死	奸	無	探	手	血	襲	夕	二	二
	馬	田	錯	馬	風	前		賴				氣		雲	つ	つ
		狼	事	す	破	の	氣		同			の		卑	の	の
禍	藉	件	心	門	前	質	闘	策	盟	査	錠	徒	撃	怯	花	影

一八九	一八七	一八四	一七六	一七七	一七三	一六六	一六三	一五八	一五五	一五二	一四七	一四三	一三七	一三三	一三〇	一二七
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

剗	妖	略	大鹽平八郎	附	餘	明曆	夕雲	激湍	瓦	仇討	かぶき	急	小柴	逃	焦	轉
髮	神		八郎			振袖	深	に流		地	者		木	散		落
妾	相	傳		記	燼	火事	耕	る	解	獄	魂	訴	し	行	燥	兆

三三四	二六六	二六五		二六二	二五二	二四二	二三八	二三四	二三〇	二二五	二二〇	二一七	二一三	二一〇	二〇五	二〇〇
-----	-----	-----	--	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

自	義	義	義	窮	坊	蘆
ら	亂		亂		主	
焚	の	亂	前		狩	邊
く	後	行	記	民	り	風

五 九 一	五 七 五	五 二 四	四 九 四	四 六 二	四 一 七	三 五 九
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

風
流
殺
法
陣

序景

兩國廣場

兩國の廣小路は、眞つ盛りだつた。團扇の人氣は、佐五七組の門彌ときまつたらしく、擔ぎ團扇屋の大看板、二尺丸の團扇は、大抵、佐五七組で——門彌が多い。枸杞の油で固め立てた辰松風の頭に描かれてゐた。

もう一つの人氣は「大阪下り熊娘」といふ見世物だらう。大轎を二本立てた葎張りの小屋の前に見物は、瞬いたり、仰向いたり——初上り竹八も、若紫歌舞伎も、それに押されてゐた。

河岸には水茶屋が、左右へ十五六軒づつ、粗末な板屋根の葎簾がこひで、店先に茶釜と、紋を書いた匱立てを陳べて、女が二人か、三人、近ごろ流行りかけてきた襟を濃くした化粧で、嬌聲と、媚瞳を投げかけてゐた。

兩國橋の通りには、鳥目兩替、謡曲浪人、大道易者、二八蕎麥、油場、飴、まんぢう屋といったやうなものが、小さい店を、臺の上に、大地の上に並べ立ててゐた。人々は、橋から一足離れると、人いきれの充滿してゐる

中を、暑がりながら、さういふ店の横をくぐつて、裏の見世物小屋へ入つて行つた。

橋詰の、番所だけは、靜肅に、突棒、さすまたの類を表へ立て、幕を張つた中に、番人が二人、袴をつけて、手を膝に端然として坐つてゐた。

人々の動きから、話聲から、物賣りの呼聲から、下駄の音から、喧騒さは、空中へ高く反響して、雨の夜だと、明瞭と聞える淺草寺の鐘も、寛永寺の鐘も、人々の耳には入らなかつた。

狭い橋の上には、肌を風に樂しませてゐる人々が小鳥のやうに凭れてゐた。用事をもつた人々は、土分の者は、聲をかけたなり、押分けたりしないと、仲々通れなかつた。時、橋番所から、追つ拂ひにくるが、少し動くだけで、すぐ河を眺めた。

橋の下では、小さい遊散舟が、きつと、男と女と、または、女達と男と、酒を酌交したり、三味線を爪弾きしたり、話したり笑つたり、——この人々には、廣小路の喧騒さへ判らなかつた。

松平織部正の新造屋形船、七五三彌丸は、かうした隅田川の眞中を、遊散舟の眞中を、鍵櫓、節り幕、笛、鼓で、川上へ漕ぎ上つて行つた。

「雨だ。」

「おやつ。」

「やつて来やがつたよ。」

「どうして、かう降りやあがるんだらう。——また、やけ

に脚の早い雨だ、ちよつ。」

人々も、舟も、小屋も亂れた。

草々

百姓達は、目がさめると、欠伸の前に、雨が降つてゐるか、ゐないか、全身を耳にして聞いた。起きると、すぐ雨戸から首を出して空を眺めた。

「今日も、雨だ。」

と、いふ日と、

「今日も、降りさうもない。」

と、いふ日と——百姓が、どんなに努力してみても、雨がつかぬいたり、暑熱がつかぬいたり、天地は調和しなかつた。麥畑には、雜草が麥と同じ位の背にのびてゐた。麥は、雜草に壓迫されて、よろめきながら佇んでゐた。枝豆は、葉だけは新鮮であつたが、豆は小さくいぢけてしまつてゐるし、かぼちゃは不良少年のやうに、子供の時から、尻を腐らせてしまつた。

井戸の水が残り少なくなつて、掻き上げて汲むと濁つてきた。螢も、蛙も、水すましも、源五郎虫も、水がないので、乾燥しきつたからく土の上で、ぼんやりしたり、手足をのびたりしてゐた。

それから、雨がつかぬ。川が氾濫した。麥畑が水漬かりになるし、枝豆は流されるし、苗は、流れてきた土と、砂と、石との下に埋もれるし、蛙も、水すましも、源五郎虫も、呆れながら押流されてしまつた。

百姓達は、精神的にも、肉體的にも、眩暈を感じてゐた。呪咀と、絶望とで、一切の新らしい力をなくしてゐた。不十分な食事と、何の間食する物もなくなつた小供達は、どんなよりした瞳を空虚にして、口を開けて、手足をふらりとさせてゐた。

女房達と、鶏とだけが、ヒステリックになつて、泣いてみたり、叫んでみたり——それから、牛はいつの間にか賣られるし、犬は首を下げて、よろ／＼と、嗅いで廻るだけであつた。

鉄も、鋤も、眞つ赤に錆びてしまつた。水漬かりの米は買手がなかつたので、百姓達は泣きながら、自分の食料にした。小さい子供は、白い飯を喜んで、兄に叱られて泣くし、鶏はお餘りの争鬭に半町も追駈けた。

領主、松平織部正は、邸の中か、七五三彌丸かにゐて、麥畑の悲惨さも、子供の元氣なさも知らなかつた。金になつたので檢地して、少し租税を取立てるのが、一番好い方法だらうと、門簾の湯殿へ入つてゐる暇に考へて、江戸家老青地主計を召出した。

利にさとき人々

商人達も、乾燥しきつた空氣と、土煙と、米高とに、顔を歪めてゐた。街道の休み茶屋の主人は、

「かう暑いと、旅人が出んものなう。」

と、大聲で、馬子へ怒鳴つた。

町の商人達は、百姓が、雨乞ひと、水かひと、草取りとに忙しくつて、地藏の市にも、馬頭觀音の祭りにも、賣上げが少なかつたので、不平を吐いてゐた。

殿の御手許、御不如意のため、武士達も買物を差控へるやうになつたので、商人達は二重に顧客を少なくして——そして、問屋からくる馬子が暑いからといつて、酒手をねだるのをさへ、心配しなければならなかつた。

それから、川が氾濫して、八ヶ村餘りへ水が浸入したので、益に取立てるべき、半年分の賣懸代金が、當分回收絶望になりさうなので、夫婦喧嘩をしたり、江戸の間屋へ、

今から泣きついたり、去年もらつた女房の里へ女房をやつて、借金のことを小當なりに當たらせてみたり——だが、その内に、百姓達は、諸道具を、着類を、自分の晴着、子供の正月の物、馬、牛、それから、家屋まで、賣りにくるやうになつた。

「そりや、あんまりひどい、傳助どん——」

「ぢや、買はねえ。今年しや、日本中こんな御天氣で、どこも不景氣なんだから、この値で買つても、儲かりやせん。ほしうないから持つて歸り。」

「子供が、さあ、兄の賣るんなら、俺のも賣りよ、——と泣きながら、おらの手の中へ、押込んだ——こ、この着物だ。」

主人は、商賣に、センチメンタルは拒絶しなくつてはならぬと知つてゐた。だが、その夜、

「考へると、可哀さうだのう。だが、これで、江戸の古着屋へ賣ると二貫匁は儲かるでう。もう一本つけるよ。」と、女房へ微笑した。

「檢地か?——檢地するたんびに、百町の田畑は百二三町にされてよ。前々の御領主様の時にや、こゝいら三ヶ村で八十町だつたのが、九十町になり、今度の檢地ぢや、百町できくまいぜ。だが、おいらの腹の痛む譯ぢやねえ。御百

姓が、九十町の割で收めてゐたのを、百町の割で納めるやうになるだけだ。然し、日照りと、水害の上に、九升納めりやよかつたのを一斗になるなんて、全く御氣の毒様だ。江戸の殿様は、毎日、御舟で、トンチキチンつて話だが」と、商人達は、ひそ／＼と、噂について、批評をしてゐた。

青年晋之助

國家老、飯沼内記の子息、晋之助は、弓を、槍を、劍を、馬を、學文を學ぶことよりも、近ごろは女中のお類を想ふ時が、多くなつてきた。

一つの邸にゐたが、國家老の件として、女中風情には、濫りに口をきくことさへ、父母は——もちろん、仲間への手前としても出来ないことであつた。

廊下の往來に、たまの使に行く姿が窓下を通る時、時々、の食事の給仕に——晋之助は、女の眼から様子から、何かを知らうと、神經を集中した。

彼女の瞳から、言葉の端から、動作から、晋之助は、聰明な感じを、しみ／＼と、彼の肌に、頭にしみ込ませてゐる上に、お類は、明るく、朗らかに、忠實に、禮儀正しく——それは、城中の奥女中共よりも、遙に優れた種類のも

のであつた。

それから、もちろん、もう一つの重大な條件として、お類は美しかつた。その美しさ、聰明さとは、世間すれのした小者、仲間達をも威壓するのに充分で、彼等は、お類の朋輩に、悪い巫山戯かたをすることもあるが、お類には、言語も、動作も、尊敬をもつてつくしてゐた。

だから、内記夫婦にもお氣に入りで——父にも、母にも氣に入つてゐるといふことが、晋之助の戀を一層深いものにした。

すべての女を、自分の意志で選擇できないと知つてゐる彼は、また、同時に、すべての女との接觸を禁じられてゐる彼は、その手近に、見出した愛すべき女への好意を、一夜ごとに灼熱させて行くのは當然であつた。然し、武士の件として、十九の彼として、さういふことをいひ出せば、「たはけつ。」

と、一喝されて、お類は暇を出されてしまふであらうし。

然しながら、飯沼内記夫妻も、ふと、さういふことをいはないでもなかつた。

「うい、家中にも稀らしい利發者で御座ります。」と、女がいふと、内記が、

「うむ、あれだけの女はめつたにない。」

「主分の者の娘なら、伴の嫁にもらつても。」

「さう、少し、身分がちがふからのう。」

お類は、水吞百姓の娘で、どういふ手段を取らうとも、家老の伴の妻になれる柄ではなかつた。

だがまた、純情な青年、晋之助が、さういふ習慣、掟の一切を知りながら、その利口さと、美しさとに、心臓と、頭腦とを惑亂させてゐるのも、極めて自然であつた。

國家老として

飯沼内記は、銀に唐草を彫刻した長い煙管を、高時繪した煙草盆の上へ置くと、鼻から一氣に煙を放出した。煙は、スチームの噴出するやうに口から二尺近くも出ると、ゆるゆると擴がり始めた。

江戸詰の同職、青地主計からの急飛脚が持參した手紙には、二三日中に、檢地の件につき作事方を行かせるから——と、あつた。

國更へになれば、行つた先で、必ず新らしく土地を計量して、實際面積が百坪あれば、これを八十年に書上げて、二十年の差を百姓に與へるのは、當時の習慣であつた。然し、五人も、六人も領主が代つて、代る度に、一坪で

も、二坪でも少くなつて行くのは百姓としてもちろん、不利であつたから、領主の更代を喜ばなかつたし、新領主も檢地は成るべくしないやうにしてゐたが、手許が苦しなくなるにつれ、權利を主張するものも、また領主としては、正當の處置であつた。

（手續は、正しい、然し——）

（手許不如意は、七五三彌丸を作つたからである。遊散舟を作つて、金が不足したからとて、百姓から召上げる？——）

（それもいゝ——だが、今の夏は？——）

と、内記は、煙の漂つて、動かないまゝに消えて行くのをちつと見ながら、考へてゐた。

（困つた——檢地させねば、殿の御意に反くし、すれば、百姓を苦しめることになる。國許のことが一切、國家老である自分の責任になるものとすれば、江戸家老として、殿を補佐してゐる主計が、何故、あの造船を、もつと、手強く反對しないか？ 噂に聞くと、殿と同道して遊興をしてゐるらしいが——）

それ以上考へると、内記の周囲は、蒼黒い、そして、不快な臭氣のある世界になつて来た。

（とにかく、作事奉行、御納戸方の來着を待つことにしよう）

う)

と少し、髻の延びかけてきた頤を撫でてゐたが、煙草釜の抽出しから、五寸餘りの大きい毛拔を出して、頤の手を抜きかけた。床の間には、柳生宗矩の、

「無癡」

と、大書した軸がかゝつてゐた。内記の好きな言葉で、少し考へごとがあると、毛拔きを出して、頤を撫でてゐると、無癡ではないが、無心の境に入ることができた。

無住心劍

街道は、馬の踏むたびに、人の歩むたびに、もくくと土煙が昇つた。馬は、腹の底まで、人々は膝頭の上まで、馬子は背中まで、土煙で白くさせながら喘いでゐた。

木立は、森は、林は動かなかつた。草々は時々、白い葉の裏を見せることもあるが、土まみれになつて、佇んでゐた。鶏も、木蔭へ入るし、犬も日蔭に臥て、舌しか出さななし、旅人は——旅をしなくてはならぬから、その土煙と、灼熱のなかを、濡手拭を肩に、蓮の葉を笠のうへに、黙つて歩いてゐた。

坊主頭で、短い刀を一本、齧ごろ四十餘り、坊主でなく遊人でなく、町人でなく、もちろん、百姓でなく、武士で

なく——着物は、黒染の麻を裾短に折つて、素足に草履をはいてゐた。

身の丈は、六尺近くあるだらうし、眼は深々と、理智と光りともつてゐた。手拭を頭にのせて直射してくる陽を防いでゐるが、足は、ゆるやかに、だが、可成りの速力で脣に微笑の影を刻みながら、

「松島の、松を探ねて、松島や——」

と、同じ唄を、繰返くし、歩んで行つた。

來住してゐる旅人達は、この男を、少しも知らなかつたし、知らうとしない位に、暑さに喘いでゐたが、この人こそ、無住心劍の始祖、針ヶ谷夕雲であつた。

新蔭流四代の正統、紙屋傳心齋賴春。柳生流二代、柳生宗多。幕屋新蔭流二代、幕屋大休。天流の加古利兵衛等と併稱されてゐたが、家柄がなく、本を讀んだ學問とてなく

——だが、極めて自然な——だから、さういふ有名な劍客達と決して相容れない——然しながら、或は、さういふ人達よりも、えらい人物であつたと思はせる名人であつた。

針ヶ谷夕雲は、歸國の途中であつた。彼は、朝湯へ入つてゐて、國の百姓の窮乏、苦難を聞くと、そのまゝ手拭を頭にのせて、東の方へ歩き出したのであつた。

「松島の松の色、松の色——」

町人を抜き、馬を抜いて、夕雲先生は、土煙の中を、肩まで薄白くしながら歩いて行つた。

不良人達

「たまにやあ、女の一つも、いちり廻して見てえや——それつ、出ろ」

と、一人が賽を振つた。彼等は悉く、褌一つで、腕に、背に、太股に刺青をしてゐた。

「もう、三日になるぜ。さ、と、聞いただけで、ぐうーつと、虫が上つてくらあ。」

「酒をなるべく賣らぬやうつて、どん家老の、どん龜め、うぬあ、酒を食はねえか知んねえが——」

「酒をくらはん人間があるけえ。馬鹿にするな。」

「何んて暑いんだらう。西日が當たる壁だと、背中まで暑いぜ。」

「早く、どん百姓め、一揆を起こすんなら、起こしさらせ。一揆でも起こらにや、日干しが六足でき上らあな。」

「日干し、蔭干し、つくづく法師つて——」

「おうく、洒落た御經の文句を吐かすぜ。」

「おい、常公、今夜あたり一つ、街道で——やらうか。」

「さうだのう、何んぼ、畑を荒しても、菜つ葉も芋も、食

へねえちや、お話しになんねえ。」

「旅人、金かせ。」

「おや、音色かい。」

「葉色だらう。」

「何を——女、金かせ、金がないなら——」

「女つていや、新治村の、そら、お玉か、お品か、吉原へ賣られたつていふぢやねえか。」

「あの、ぼちやつとしたのかい。」

「さうよ。」

「こ、こいつあ、こたへられねえ。身體質に置いても行かざあなるまい。」

「まづ、あの御面相だと、うめ茶には行かあな、一晚抱いて一步。」

「おらあよしだ。一步ありや、三日、酒が抱いて寝れらあ。」

「おい、戯談を置いて、問屋の旦那は、きつと、百姓が暴れ込みます。暴れ込みましたその節は、命を的に働きますから、旦那、御手附なりとも、少々と、一番やらかさうぢやねえか。」

「兄貴や、辯口がうめえから、やつて貰はうぢやねえか。」

「日照りだ、水つきだ、檢地だときて、今度あ、助郷だ。村方で、喧ましく騒ぐのも無理はねえ、俺ら、こゝ一月の